

## 江戸・東京 地域トリビア 其の一

### 江戸本所深川切絵図

最近では、古地図のブームのようです。昔から日本人は地図が好きなので、江戸時代には精度の高い地図ができています。特に、伊能忠敬の日本全図は文政四年(1821年)に完成しましたが、その出来具合は世界的にも非常に優れたものでした。

江戸では、先ず国絵図、都市図などは、徳川幕府や各大名が作った官制の地図でしたが、これは機密文書の類であり、なかなか一般に普及しませんでした。時代が進むにつれて、人々の移動が盛んになり、地図の需要も大きくなっていきました。一方で機密性も薄れていったために、一般に広がっていき、特に江戸後期には、一般向けの地図が発展しました。

江戸の地図では、お城を中心にして江戸の町を網羅した「江戸全図」と幾つかに区分けした「江戸切絵図」があります。「江戸全図」は文字通り江戸全体を一枚の地図にしたものですが、大きいものでは1.5メートル四方近くもあります。これはとても持ち運びできるものではありません。旅や町中を歩くときに重宝のように、小さく区分して、しかも掌中に入るよう折りたたんだ「切絵図」

が評判を呼び、随分売れたようです。これは木版の極彩色の絵図で、これだけでも浮世絵の一ジャンルといえるものです。

江戸切絵図の代表的なものとしては、「近江屋版切絵図」と「尾張屋版切絵図」があります。「金鱗堂尾張屋清七版切絵図」は嘉永二年(1849年)から七年に渡って順次発行され、赤、青、緑、黄色などの鮮やかな色を使って、しかも図案化された切絵図です。今はカーナビやスマートフォンに地図情報が表示され、非常に便利になりましたが、江戸時代の携帯用地図が「切絵図」です。

尾張屋版切絵図は、江戸城のお堀の中「御曲輪内大名小路絵図」から始まって、「麴町永田町外神田絵図」「東都番町絵図」など、お城から右回りに2回りして、31枚の区分図で構成されています。我が墨田区、江東区は「隅田川向島絵図」「本所絵図」「深川絵図」の3図で表されています。

尾張屋清七が切絵図を売り出していったいきさつについては、藤原緋沙子さんの小説「切り絵図屋清七 ふたり静」の中に書かれています。池波正太郎さんは江戸の小説を書く際は、切絵図を手元においてイメージしながら書いたということです。また、藤

沢周平さんは、本所、深川を舞台にした市井の人情ものを多く書いていて、切絵図にある場所が随分出てきます。

墨田区では、スカイツリーが一大観光名所となり、沢山の観光客に来ていただいています。墨田・江東エリア全体で観光による地域活性化に力をいれていて、最近新しい観光名所として3月17日に「亀戸梅屋敷」がオープンしました。休憩所、観光案内所のほか、水陸両用バス「スカイダック」の発着所が設置されています。水陸両用バスでスカイツリー、亀戸梅屋敷、中川船番所を巡って回ります。江東区は「水の都」というほど川や運河が多く、このルートに北十間川、横十間川、小名木川、中川(旧中川)があります。

本所切絵図によれば、スカイツリーのある場所は、江戸時代は「小梅村」といいました。小梅村は、大川(隅田川)を渡った向嶋ののどかな田園地帯で、商家の隠居所やお金持ちの妾宅があった所です。佐伯泰英さんの小説「居眠り磐音 江戸双紙」の中で坂崎磐音が剣術道場を開いた場所として出てきます。西郷さんが東京を後にして薩摩に戻る際、少しの間小梅村にある越後屋(三越)の寮に滞在していたことも知られています。

また切絵図では、江戸時代の梅屋敷は、新しく出来た亀戸梅屋敷より少し北の本所亀戸村の外れ、北十間川の畔にありました。江戸時代の「梅屋敷」は呉服商伊勢屋彦右衛門の別荘で、庭園の梅が見事であったそうです。歌川広重の浮世絵「名所江戸百景」の中に、梅屋敷が描かれています。「臥竜梅」という一本の梅の木だけが描かれており、ゴッホが模写をしたことでも有名です。

中川船番所は、江戸に出入りする船を検閲する一種の関所で、現在は「中川船番所資料館」となっています。中川から小名木川に入るところにありますが、残念ながら尾張屋版の切絵図では絵図の外になっていて、描かれていません。一方、近江屋版の切絵図では、絵図の右端に出てきます。

本所切絵図や深川切絵図には、スカイダックの運行される川や運河があり、また橋も当時の名前のままのところも多くあります。皆さん、切絵図を持って町中を散歩してみませんか。復刻版が出ていますので、今でも手に入ります。古い地図で新しい発見が出来ますよ。

